

Waldenにおける経済生活の一考察： “Economy” を中心に

林, 南乃加
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24647>

出版情報 : Comparatio. 15, pp.19-29, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



Walden における経済生活の一考察

—“Economy”を中心に—

林南乃加

はじめに

Henry David Thoreau による著作 *Walden* (1854) は、ネイチャーライティング屈指の作品と評されているが、これまでの研究では主に野生における楽園やユートピア、自然と人間の共存と調和、修辞学的手法や各章の比較等の観点から幅広く考察されてきた。周知のようにエコロジー的解釈を試みられることの多い作品であるが、ウォールデンにおいて経済生活の実践を行うという問題は、Thoreau が自然と関わる根本であっただけに、未だ議論の余地に残された重要な問題である。“Economy”は、文明社会の抱える政治、宗教、労働など幅広い分野における問題が提起され、批評家も様々な見地から考察している。しかし“Economy”の核となる問題は衣食住であり、それは Thoreau の哲学を反映することから、この章はウォールデンでの自然生活を読み解く上でキー・チャプターとして考えられる。Thoreau は、文明から離れた自然という空間において、生きることを根源から模索しようとした。その土台としての衣食住に着目し、Thoreau の経済生活とは如何なる意義を持ちうるのかを考察することが本稿の目的である。まず、第一の問題点として、19世紀中葉における産業社会発展期において Thoreau がウォールデンの自然で生活を送るという行為は、Thoreau の哲学にとって何を意味するのかを検討する。第二に、当時 L. M. Child や Catharine Beecher らは家庭における儉約主義を中心とする家政学を展開したが、それは Thoreau の簡素志向にいかに関連づけられ、又は対照的だといえるのかという問題を検討する。第三に、“Economy”では Thoreau は衣食住の哲学に迫るが、“Higher Laws”においては実際に生活人としての Thoreau のより具体的な生活思想が、「食」という問題において窺える点において、この二章の関連性は何なのかということを考えたい。以上をふまえ、本稿では“Economy”に照射することで、自然に根ざした経済生活の有用性とは何であるかを考察したい。

1. 自然における生活の“experiment”

最も長い最初の章“Economy”には、内容的に二つの特徴が見られる。一つは独居生活を打ち立てるために費やした出費を数値的かつ客観的に分析していることだ。もう一点は、当時の文明社会の枠組みから独立し、シンプリシティという信条に基づいて居住空間を構築しようとする生活哲学の言及である。いずれの特徴においても、Thoreau が本作品を独居生活という問題提起から構成しようとしていることが窺える。作品の冒頭で、“I lived alone, in the woods, a mile from any neighbor, in a house which I had built myself, on the shore of

Walden Pond, in Concord, Massachusetts, and earned my living by the labor of my hands only. . . .” (W1)と、ウォールデン湖の岸辺に家を建て、自らの手のみで生計を立て、一人で住んだという経験が述べられ、当時の一般的家庭形態から離れた生活の強い意識と表明が、本作品全体に向けられる。この箇所から *Walden* 全体において、Thoreau が自然に自己の生活を根ざす記述が発する。

これまで多くの批評家は、18章から成る *Walden* の中でも特に“Economy”に注目してきた。その主要な批評の視点は、“Economy”が本作品の「循環」又は「円環」的テーマの基点であること、あるいは L. M. Child らに始まる家政学との比較や、Thoreau の人生哲学の語り、そして文明と自然との対置などが挙げられるが、“Economy”の解釈と位置づけは実に幅広い。Leonard N. Newfeldt は、“Economy”を執筆と校正面から分析し、「ウォールデンでの自己修養と若者に向けられた喜劇的かつ真剣性を含んだ成功のパロディとして語る目的があり、最終原稿の“Economy”はあとに続く章とはるかに統一感のある形式になっている」と論じる (61-62)¹。Newfeldt の分析のように、“Economy”における語りや表現は、後の自然生活と観察の記録へと繋がる構成要素であるだけに注目すべきであるが、この章の語りの構成をとおして見るべき点は、“Economy”が文字どおり経済問題のみを扱う章ではなく、いかに生活をとおして自己を確立するかという人生の本質的問題に迫り、それが残りの章へと余韻を残していくことである。例えば Thoreau が “I mean that they should not *play* life, or *study* it merely, while the community supports them at this expensive game, but earnestly *live* it from beginning to end.” (34) と述べる一文を見ると、学生（「若者」）に対して「この費用のかかる（不経済な）遊びで社会が支えてくれる間、学生は、人生を弄んだり、単に学んだりするのはなく、最初から最後まで、真剣に生きるべきだ」と冗談を交え「生きる」ことの真剣さを示唆し、教養よりも人生を自身で徹底的に築くことの重要性を強調する。こうした姿勢がウォールデンの自然において自己の在り処を独自で確立させようとする行為の根底にあり、本作品で「人間としていかに生き、人生に向き合うべきか」という問題を投げかける。“Where I Lived”における有名な一節を見てみたい。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practice resignation, unless it was quite necessary. I wanted to live deep and suck out all the marrow of life, to live so sturdily and Spartan-like as to put to rout all that was not life, to cut a broad swath and shave close, to drive life into a corner, and reduce it to lowest terms. . . . (W61)

¹ Newfeldt は執筆過程と、*Walden* を成熟させるに至った作品全体の特徴や構造を明らかにする。

Thoreau は、「森へ行ったのは人生を慎重に生き、人生の本質的な事実のみに直面するためであり、人生が教えてくれるものを学べるか確かめてみたいからで、死ぬときに、自分が生きてこなかったことを発見するようなことになりたくなかったからだ。生きることはそれほど大切で、私は諦めることも望まなかった。私は深く生きて人生の精髓を吸いつくし、人生でないものは打ち破って根元まで刈り込み、生活を隅々まで追いやって、頑強でスパルタ人のように生きたい。」と確固たる表現でもって「生きる」ことに向き合おうとする。つまり、人生として実感できないような生き方だけはしたくないという徹底した哲学が土台となって、ウォールデンにおいて自身の人生を根底から見直し、「隅々まで」追いやった生活実践を行うことになるのである。

では、Thoreau が人生哲学を実践する場としてウォールデンの自然を選んだことには如何なる要因があるのだろうか。“Economy”に再度着目すると、上岡克己はこの章を「雑多な寄せ集めの章」と分析した上で、「壮大な文明化の過程にメスを入れた章と見なすことが可能である」と述べる。さらに上岡は「*Walden* では神の作品としての自然と、人間の造り出した作品—物や機械—との対照が意図的に設定され、後者の世界が特に“Economy”に一貫して見出されるのである」と論じる(41-43)。本作品では“The Ponds”におけるウォールデン湖の“purity”のように、湖の純度がピューリタンの視点から神の「神聖さ」を一途に想起させる描写も一特徴として見られるが、“Economy”は「物や機械」の世界に一貫していると論じる上岡の見解のように、文明化社会から離れて生きようとする Thoreau は、文明がもたらした物質主義を鋭く批判し、人間の精神的存在としての在り方を根底から問うているのである。ここで留意したいのは、H. A. Page が指摘するように「Thoreau が抵抗していたのは文明ではなく、文明によって引き起こされた特別の悪である」ことだ(132)。例えば Thoreau は“Most of the luxuries, and many of the so called comforts of life, are not only not indispensable, but positive hindrances to the elevation of mankind.”(9)と、贅沢品とは必要でないだけでなく、人間の精神的向上が損なわれるものであると述べ、文明がもたらした物質主義に傾く人間像を批判する。また、有名な一文“*But lo! Men have become the tools of their tools.*”(W 25)では、人間が道具を開発しながらも逆に道具に支配される存在となってしまったことを嘆き、人間は精神的存在というより単なるモノの価値と同等になってしまったことを示唆する。このような危惧の下、Thoreau は文明に支配された日常の中で自身を取り巻くものを全て見詰め直す必要性を徹底して説き、文明社会に浸った生活から離れて、ウォールデンでの独居生活を営むという、“to live sturdily and Spartan-like”(W 61)と表現するまでの命題を実行するのである。

以上をふまえて“Economy”で注目したい一特徴は、語りかけようとする読者層を“poor students”(W 1)と定義している点である。“Poor students”とは文字どおり経済的な貧困者というよりもむしろ、経済を暮らしの中に有用に生かす術を見につけようと模索する者を示唆するように思われる。またこの語は、Thoreau 自身の、自給自足の質素な暮らしに、哲学を反映させようとする姿勢をも喚起させる。Thoreau は“Even the poor students studies and

is taught only political economy, while that economy of living which is synonymous with philosophy is not even sincerely professed in our college.”(W35)と述べ、政治経済学といった学問の範疇では捉えられない分野としての経済を示している。つまり、“poor students”と“poverty”とは金銭的な貧しさではなく、むしろ精神的な豊かさと対比的で、自己の内面にある精神性を生活に反映していくことのできない者を示唆すると考えられる。それは文明社会の枠組みに生きる人間に呼びかける表現である。Thoreau にとっての経済とはウォールデンの自然に根ざし、その環境の中に位置づけられ、根本的な人間生活を体得することを意味する。その生活は“economy of life”ではなく“economy of living”という表現に示唆されているように、構築するもので、哲学 (“philosophy”) と同義であるが故に、自身の内面性に従って確立すべきものであることを Thoreau は主張する。

Thoreau の経済生活は、哲学と同様に実践が伴わなければならない問題であるが、主に哲学を含意する行為として捉えられる傾向が強いようだ。例えば Steven Fink は「ソローと聴衆」という関係から本作品の聴衆を意識した語りに注目し、“Economy”については“poverty is really a spiritual condition, and his ‘economy’ a spiritual economy”と述べ、精神的豊かさを模索することが Thoreau の説く経済に価値を与えていることを示す(85)。Fink の見解のように、Thoreau と読者の関連性から見れば、精神面において経済という問題を見出すことができるであろう。しかし、Thoreau にとっての経済的価値とは前述のとおり自己の生活の構築実践と同時に哲学を表すことから²、Thoreau はまず日常で身边を取り囲む生活において、人間の精神性を問う。この点において Thoreau にとっての経済生活とはリアルであり、自身の哲学を反映させようとした“experiment”である。自然という文明から離れた環境において人間としての真の必要性に迫ろうとする Thoreau の哲学は、「頑強な」までに生活を打ち立て、人生に向き合おうとする実践志向を含んでいるのである。

2. 衣食住の簡素化とドメスティック・エコノミー

前章で検討した経済の実践志向を念頭に置き、衣食住の簡素性に注目することで、Thoreau にとっての経済を具体的に考察したい。その際、当時の産業資本主義が家庭を一変させ、生活を変え、女性を中心とした家庭における経済に対する認識に影響を与えると同時に、社会的にも経済が見直されることになった風潮についても触れてみたい。

Thoreau がウォールデン湖畔に住み始めた時、Catherine Beecher を創始者とした、いわゆる家政学と呼ばれる一つの学問体系がすでに発展していた。周知のように家政学は、家庭を任された女性が、産業社会に貢献すべく家を離れて働く夫とは対照的に、妻又は母として理想的な家庭の在り方を問うことに基点を置く。それは儉約ばかりを唱えるものではなく、

² Robert Dickens が Thoreau を “an intuitionist with some leanings toward pragmatism”(17)と見なすように、これまでに多くの批評家も Thoreau を (特に Emerson の理想主義と比較して)「実践主義者」と称してきたが、Thoreau の理想的で直感主義的側面にも注目は高い。

主婦として経済管理をいかに行うか、また子供の世話や家族の健康をいかに保つかという問題をはじめ、家庭に関する一切の知識と認識を、女性が培う必要性があるとして発展を遂げた。それは産業社会に副次的な力として貢献する女性の「力」を強調するものでもあり、後のフェミニズム思想へ繋がる。Beecher による *A Treatise on Domestic Economy* では、最初に女性の役割と責任を説き、健康管理の必要性、衣食住を合理的かつ秩序づけて管理すること、主婦の平静さを保つこと、慈善活動への参加、時間節約、社会的義務、裁縫、植物の栽培、事故の対処法、病人の世話、家の建築に至るまで、こと細かに家の管理法が網羅されている³。家政学はこうした家庭管理の知識を女性に身につけさせることを教育目的とし、女性の存在意義と役割への認識は高められた。この点において、Thoreau の独立経済実践志向にも、Beecher に始まる家政学の応用にも、プラグマティズムが通底することは確かである。Thoreau の説く簡索性も、家政学の説く儉約主義によって、社会的にその認識が高められたことも否定できないであろう。

しかしここで考慮すべき点は、Thoreau の生活信条と家政学の相違である。Thoreau の簡素生活が、精神的存在としての人間の根元的レベルに近づくことに対して、家政学は家庭的諸事物をいかに合理的に処理するかということを問題とした。Thoreau は“*necessary of life*”とは“so important to human life that few, if any, whether from savageness, or poverty, or philosophy, ever attempt to do without it.”(*W7 italics original*)と述べ、生活必需品とは人間の生活にとってあまりに重要となったので、ほとんどの人が、生活に欠かせない必需品なしに暮らしてはいけなくなったことを喚起させる。さらに、外面でうわべだけの改良品でごった返し、自ら罠に嵌った国家にとっての“the only cure”とは、“a stern and more than Spartan simplicity of life and elevation of purpose”だけであると断言し、厳しいほどの徹底した簡素生活を試み、人生における目的を向上させることだけであるという(*W 62*)。つまり、Philip Cafaro が論じるように、Thoreau は簡素な暮らしの習慣をとおして「厳しい仕事の習慣が欠かせないと信じ、人々は自分自身の生活を作っていく責任があると考えていた」のである(89)。

Thoreau にとっての簡索性とは、物質面で複雑性を除去する作業であり、いかに一つの真実に近づくかという物的手段を示唆する。松尾力雄は Thoreau の簡索性を「発生源」から考察し、「容認されざる簡素さは外界、内面、両者の圧力によるものであり、主張される種のものは当人の内部発生的なもので、生きる真の目的との無関係さゆえの諸事物の排除に起因するもの」(109)と述べる⁴。松尾の見解は、Thoreau の主張する簡索性とは自発的要因に基づくものであると示す。産業社会の到来によって物質文化と家庭内における物質所持品も増えて一変した当時のニュー・イングランドにおいて、Thoreau が説く生活の簡素化とは、衣食

³ 今井光英による『アメリカ家政学前史』では、Beecher に始まる家政学がピューリタンとしての宗教的価値観を含む点を考察し、フェミニズム思想に至るまでを詳述している。

⁴ さらに松尾は、「ソーロウは他の超絶主義者とは異なり、自らの生涯を賭けて個人的、社会的に、この主張を実践した」と述べ、Thoreau の人生哲学の視点から簡索性を分析する(110)。

住の根本のみと向き合い、個人が自己にとって必要なものだけを選び取る能力を備えるべき生活志向だといえる。そして、その簡素性は自然と関連したものである。Thoreau は“Every morning was a cheerful invitation to make my life of equal simplicity, and I may say innocence, with Nature herself.”(W60)と、「毎朝が自然と同じ簡素で、無垢な生活へと陽気に導いてくれるものであった」と述べ、簡素性を自然そのものから見出して同化させるような試みを示唆し、自然環境に簡素な日常生活を依拠させる。Thoreau の簡素性は、家政学の説く経済管理法とは異なり、自然環境へと還元されるのである。その一方で、家政学は、いかに家庭内の物品を合理的に整理し、経済的にやりくりし、家庭を健康的に維持するかが妻又は母を中心として家族との絶対的な連携の中で見出される。Thoreau の簡素性は人間が一個人として一つの真実に近づくための修練とも呼ぶべきもので、その目的は人間社会の枠組みから離れた自然という環境の中で、自己の人生の本質へとひたすら向かうものだ。

Thoreau の簡素生活における本質的要素について検討すると、Thoreau は“Economy”で、ニュー・イングランドに住む人々にとって必要な供給品となるものは主に食べ物、住まい、衣服、そして燃料⁵に関するものに分けられるとし、その中でも、適切な住まいと衣服によって人間は内部の熱を合法的に保つことができるという。さらに、動物の生命体とは動物の熱と同義であり、人間も同様の原理で、食べ物を体内で燃料として維持し、住まいと衣服は熱を発生させるために役立つものだ⁶と強調する(W 7-8)。つまり Thoreau は体外から燃料を取り込むということを、生態的あるいは生存のための絶対不可欠として認識を見せるのだが、一つの指針や原則として「熱」を化学的に如何に運用していくことは、簡素な経済生活の核であり、哲学の中心として考えられる。Thoreau は住まいについて“*It was I and Fire that lived there; and commonly my housekeeper proved trustworthy.*”と述べ、留守中は火が“housekeeper”であるという比喻でもって家における火に対しては肯定的な信頼を示す(W 161-62)。これと対照的に“*Many a man is harassed to death to pay the rent of a larger and more luxurious box who would not have frozen to death in such a box as this.*”と述べ、家という空間を「箱」とし、「(Thoreau 自身の) こんな箱の中にいても凍え死んだりしないのに、人々はより大きく贅沢な箱の家賃を払うために死ぬ思いをしている」と述べる(W 19)。この「死」という表現には、贅沢品を追い求めるあまり、衣食住の核である「熱」から離れてゆく人間像が逆説的に浮上する。無論、ここで「死」とは肉体的に没することよりもむしろ、物質主義に取りつかれた現代人が、高価な住居費を支払うために無理な労働をし、借金に追われて苦しむ経済的現状を痛烈に批判するものだ。Thoreau にとって住まいとは「熱」を保つべき場であるが、それは寒さを凌ぐためだけでなく、人間の精神性を活かすための生活において中心に据えるべき要素であると考えられる⁶。

⁵ Thoreau は、生活の必須として“Food,” “Shelter,” “Clothing,” “Fuel”と大文字化して記述する。この点は自然を“Nature”と大文字で神格化して記す点と類似している。

⁶ Marilynne K. Roach は *Down to Earth at Walden* において、ウォールデンでの衣食住と熱、鉄道、労働、測量士としての仕事、湖、ウッドチャック、マメ畑など、Thoreau の日常生活を取り囲むものを簡潔に整理している。

次に、具体的な食生活を見ていきたい。ウォールデンにおける Thoreau の食事は、主にトウモロコシのひきわり、じゃがいも、ライ麦、豚肉、糖蜜、塩、水であり、米が中心であった。また、食生活が米を中心とするのはインド哲学へ傾倒しているためだという(W40-41)。L. M. Child が“The American Frugal Housewife”にて説く家庭内のあるべき食生活は、野菜や米類をはじめ、プディングやケーキ、ドーナツ、肉や卵などバランスに富む。また、Child は調理法やコツ、食べ物の管理法を、単に家政における知識ではなくむしろ知恵として説くが、それは専ら金銭面において、家族が夫の収入内でやりくりするための経済性を考慮するためである。ウォールデンでの食生活は、Child が実践するような食事や調理とは対照的であるが、「食」という実践に対し、Thoreau がいかに哲学志向を優先させていたことが推察される。Henry S. Salt の考察のように「Thoreau が説く簡素性は表象ではなく、生きていることに対する真の楽しみに基づく」(162)ものだが、Thoreau の食実践は、“Spartan simplicity of life (W62)”と表す「頑強な」までに不必要なモノを削り取る簡素性を指すものである。

衣服については、Thoreau は“We worship not the Graces, nor the Parcae, but Fashion. She spins and weaves and cuts with full authority.”と言い、“Fashion”を崇拝し、アメリカも他国も装いというものが“dignity of art”となったと表現する(W17)。こうした表現では、産業化の隆盛によって影響を受けた消費社会そのものを嘆くかのように聞こえる。衣服は“Fashion”という市場の力を帯び、大量生産化するに伴い、人々の装いもますます多様化した。その風潮において“dignity of art”とする“Fashion”を誇張し、“Every generation laughs at the old fashions, but follows religiously the new.”(W17)と述べ、新しい世代は古い前世代の服を笑うことになるのに、崇拝するように新しいものに従っていく人間の習性を指摘し、流行の特徴ともいえる新旧の入れ替わりが問題となる。つまり、Thoreau は産業社会の在り方に直接的に批判を向けるのではなく、人間の衣服の選び方をより問題視し、“religiously”と揶揄することで人間が生活の根本的事実に向き合う姿勢から逸れてしまった点を浮彫りとする。David M. Robinson が指摘するように *Walden* は“thoughtful response to bodily necessity, the foundation of our economic identities, as a means of spiritual redemption”であり、Thoreau は、肉体的に必要性のあるもの、つまり経済という土台に対して思慮深い反応を示し、それを精神的救いの手段とする(99)。Thoreau は自然生活において、自己の哲学を反映させた簡素化の実践を行うことで、衣食住という経済に根源から向き直ろうとしたのである。

3. “Economy”と“Higher Laws”における「食」志向

前章では“Economy”を衣食住から見たが、実際にウォールデンの住人としての Thoreau がより具体的に自然生活の感覚に近づいている章は“Higher Laws”である。本章では“Economy”の延長的章である“Higher Laws”に言及し、これら二章は如何に関連しうるのが考察したい。

“Economy”と“Higher Laws”における共通する一つの問題の特徴として、まず「食」が挙げられる。この点に着目し、Thoreau の生活観を考察してみたい。元来“Higher Laws”は、第六版までは“Animal Food”という題で構想が練られており、後の原稿では“animal”と“spiritual”の狭間の Thoreau の葛藤が、より深刻に表現される章となる(Robert Sattelmeyer 436)。“Higher Laws”では最初に Thoreau は“I caught a glimpse of a woodchuck stealing across my path, and felt a strange thrill of savage delight, and was strongly tempted to seize and devour him raw. . .”と述べ、Thoreau はウォールデンの自然に生息する動物ウッドチャックを見かけたとき、捕まえて喰り食いたいという強い欲望に駆られたと記す(W 140)。それは空腹だからではなく、“spiritual life”と“a primitive rank and savage one”という、人間としての「精神的な生活」と「原始的な階級に属する野生動物」の両方に対する欲望である(W 142)。Thoreau はウォールデンの野生動物を食べるという強い願望を示唆するのだが、“Economy”で見られる、衣食住における根本としての「熱」が、ここでは“spiritual life”への本能的衝動としてウォールデンに生きる動物を「熱」として食することに置き換えられ、精神性に根ざした「食」への意識が浮上してくるのである。

“Higher Laws”ではこの「野生動物を喰り食いたい」という生々しい「食」への願望を起点に、釣りや狩猟という活動が問題となり、自然にコミットする人間像が描かれる。Thoreau もウォールデン湖でよく釣りを楽しんだが、釣りをすることに対して“I cannot fish without falling a little in self-respect”と述べ、「自尊心」が失われてゆくを感じ、釣りをすると“I feel that it would have been better if I had not fished.”と、釣りに対して積極的な姿勢を見出さなくなったことを示す。そして、調理した獲物の魚や肉が、想像上で“unclean”であるため Thoreau は抵抗を感じ、“insignificant and unnecessary”であると記す(W 143)。一般的には、釣りや狩りとは獲物を調理し食する段階までの一連の行為が楽しみに行われる。しかし Thoreau は野生動物を獲ろうとする衝動的な本能を示唆する一方で、それを食べる時になると“unclean”と“ill odors and sights”ゆえに拒絶反応を起こす(W 143)。“Economy”においては衣食住を自然と一体化させ同化させるかのような生活哲学が窺える一方、“Higher Laws”では獲物を食べるということを境に途端に嫌悪を示すのはなぜであろうか。それは一見矛盾したように思われるが、「食」に対する Thoreau の観方には、ウォールデンの自然において、精神的な要求をも満たすべき姿勢が貫かれているからだと考えられる。Harold Hellenbrand は Thoreau の肉食に注目し、“Thoreau intended to starve the ‘animal’ in himself. He would not consume meat. Meat was a fuel too rich; meat was ‘unclean.’ It congested his ‘stove,’ causing stomach and lungs to work too hard.”と述べる(73)。Hellenbrand は、Thoreau は自己の中に宿る「動物」的なものを渴望させ、肉は高価な食物であり、「不潔」であると示す。さらに、肉は胃と肺を過度に働かせてしまい、「stove」を詰まらせてしまう(73)。つまり、肉食とは Thoreau にとって、「胃と肺」という身体的な働きを無理に促してしまうが故に不必要であり、空腹を満たすための手段とは言い難いのである。狩猟での Thoreau の肉食拒否は、“Economy”において、「食」とは体内への最低限の燃料を補給することであるという簡素な食

志向と、その根本においては接点があると考えられる。また、“Economy”での専ら簡素性を重視した粗食志向と、“Higher Laws”で肉食という生々しい食への拒絶との間に見られる共通点は、生活人としての Thoreau が、精神的な中核を維持する哲学を反映させた「食」を示していることであり、肉体的要求を完成させるための食実践ではない点が挙げられる。

では、“Economy”と“Higher Laws”において「食」の問題の違いは如何に関連しうるのだろうか。Thoreau は“Higher Laws”で、“I owed a mental perception to the commonly gross sense of taste, that I have been inspired through the palate, that some berries which I had eaten on a hill-side had fed my genius. . . . He who distinguishes the true savor of his food can never be a glutton; he who does not cannot be otherwise.”と述べ、食という問題において、味覚と精神性を結びつけている(W 146)。Thoreau は、味覚をとおして精神的に“inspired”され、丘の中腹で食べた野イチゴが自分の精神を養ってくれたと記しており、一つの精神面での知覚(“perception”)を知ったという。さらに、真の味覚が分かる者は、贅沢な食事を大食いするようなことはない(W146)。ここで Thoreau の「食」は、「丘の中腹」というアウトドアにおいて提示されているが、それは肉体的必要性というよりも感覚的な次元で堪能する知覚であることが喚起される。Thoreau は、自然そのものに実感する「味覚」を見出すことで、“Economy”よりもさらに精神的な意味における「食」の問題を検討しているといえる。Thoreau の自然観を考察する新保哲は、「ソローは自然にあってはいわゆる生活力の原則を認めると共に、それを人間精神の理想として同価値に重要視する。それがソローの人間観の一側面でもあった。」とし、「おのれの感情や観念では容易に捉えることのできない、完全に意識の外側にある自然の本性へと、つき進んでいく。」と論じる(61-62)。新保の考察のように、Thoreau は「人間精神の理想」として、自己意識を超えたものを求めるべく自然にコミットするのであり、「食」はその一部と考えられるのである。

Thoreau は食事そのものに対し、肉体を養うならば想像力も養うべきで、両者は「共にテーブルにつくべき」であると述べる(W 144)。肉体的要求に偏らない Thoreau の「食」については、“Economy”での質素な食事に見たように、人生の土台を簡素化するという厳しい精神的な“experiment”を示唆しており、“Higher Laws”においては、釣りと狩りという自然での活動で得た獲物に対して想像力を保持しようとする、もう一つの“experiment”が見られる。その上で Thoreau は“I have no doubt it is a part of the destiny of the human race, in its gradual improvement, to leave off eating animals, as surely as the savage tribes have left off eating each other when they came in contact with the more civilized.”と記し、未開人が文明人と接触したとき互いの肉を食べる習慣をやめたように、人間は肉食を離れなければならない運命であると信じて疑わない(W 144)。Thoreau にとっての「食」又は「味覚」を得ることは、自然に根ざしながらも、一人間として実感できる感覚であり、想像や感覚を重んじた食生活への姿勢を示している。

John B. Pickard は“Higher Laws”を“religion”という視点から考察し、“Through ascetic discipline man can hear the faint intimation of the spirit and respond to the principles of

the higher law to realize his divine potential.”と記し、「人間は厳しい修練をとおして精神のかすかに暗示するものを聞き取り、より高い原則の本質に應えることができ、自己の内にある神聖な潜在能力を悟るのである」と結論づける(92)。この“religion”という観点は、直接的に神を示唆するのではなく、むしろ自然という摂理に対する信念であるが、“Higher Laws”は、精神的な意味で味わうことのできる“divine potential”を認識する一手段として、「食」の問題を検討していると思われる。この点において “Higher Laws”は、“Economy”における人生哲学に基づいた簡素な食実践に加え、感覚的で精神的な意味における「食」と「味覚」の問題を捉えており、これら二章は、肉体的な必要としての食欲を超越した「食」志向が見られるのである。

おわりに

Thoreau の簡素な生活は、物質面又は肉体面を制御することであるが、哲学に根ざし、精神面を高める実践であった。経済という問題は Thoreau にとって最も身近にある重要な問題であるが故に、細かく、慎重に、徹底的に向きあうべき人生の土台であった。その上で Thoreau は“Economy is a subject which admits of being treated with levity, but it cannot be disposed of.”と記し、文明社会は経済を軽率に扱ってしまう傾向にあることを暗示し、人間の取り扱うことのできない本質的問題として重要視する(W19)。Thoreau は文明社会の一般的生活から離れて、衣食住において最低限に必要なものだけを取り入れ、「自然と同等の」簡素性に合わせることで、精神的な意味において人生の根本を築こうとする。それは自然に衣食住を依拠させようとする “experiment”であった。Richard J. Schneider が述べるように *Walden* は“a very appealing myth to a postindustrial society faced with overwhelming change”(92)であり、Thoreau は産業資本主義社会の隆盛と、それに影響を受けた一般的家庭観から離れ、自己の根源的な在り処を確立しようとしたのである。

参考文献

- Beecher, Catherine Ether. *A Treatise on Domestic Economy for the Use of Young Ladies at Home and at School*. Tokyo: Athena, 2008.
- Cafaro, Philip. *Thoreau's Living Ethics: Walden and the Pursuit of Virtue*. Athens: U of Georgia P, 2004.
- Child, Lydia M. *The American Frugal Housewife*. London: The Echo Library, 2007.
- Dickens, Robert S. *Thoreau: The Complete Individualist: His Relevance—and Lack of It—For Our Time*. New York: Exposition, 1974.
- Fink, Steven. “Thoreau and his audience.” *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*. Ed. Joel Myerson. Cambridge UP, 1995. 78-91.
- Hellenbrand, Harold. “A True Integrity Day by Day.: Thoreau's Organic Economy.” *Modern Critical Interpretations: Walden*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea,

1987. 69-78.

Newfeldt, Leonard N. *The Economist: Henry Thoreau and Enterprise*. New York: Oxford UP, 1989.

Page, H. A. *Thoreau: His Life and Aims*. New York: Haskell, 1972.

Pickard, John B. "The Religion of 'Higher Laws.'" *Twentieth Century Interpretations of Walden*. Ed. Richard Ruland. Englewood Cliffs: Prentice, 1968. 85-92.

Roach, Marilynne K. *Down to Earth at Walden*. Boston: Houghton, 1980.

Robinson, David M. *Natural Life: Thoreau's Wordly Transcendentalism*. New York: Cornell UP, 2004.

Salt, Henry S. *Life of Henry David Thoreau*. New York: Haskell, 1968.

Sattelmeyer, Robert. "The Remaking of Walden." *Walden and Resistance to Civil Government*. New York: Norton, 1992. 428-444.

Schneider, Richard J. "Walden." *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*. Ed. Joel Myerson. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 92-106.

Thoreau, Henry David. *Walden and Resistance to Civil Government*. Ed. William Rossi. New York: Norton, 1992.

今井光映. 『アメリカ家政学前史—ピーチャーからリチャーズへ』 光生館、1992.

上岡克己. 『「ウォールデン」研究—全体的人間像を求めて—』 旺文社、1993.

新保哲. 『ソローの精神と現代』 行路社、1988.

松尾力雄. 『ヘンリー・ソーロウの世界』 法律文化社、1979.